

field

カンニングから考 えるエチオピアの 教育事情

有井晴香

試験とカンニング

年末である8月下旬*、8年生の学生たちは気が気でない。この時期に小学校の卒業試験の結果が発表されるからである。筆者の調査地のひとつであるエチオピア南部諸民族州南オモ県のA村でも年度末になると試験に関する話題で持ち切りとなる。発表日は事前に決まっておらず、今か今か

と発表日を待つ間、「今年はDからはじまる名前の人は全員落第したらしい」「隣村の小学校は全員合格したらしい」といった根も葉もない噂が学生のあいだで広まる。試験の結果は、小学校の校庭に貼りだされ、誰でも見ることができる(写真1)。自分の、あるいは家族、友人の試験結果を見に来る人たちが三々五々集まってくる。誰が試験に通って、誰が落ちたか、結果は瞬く間に村中に広まっていく。試験に合格した学生に出会い挨拶する

ときに「神様があなたによくしてくれたね」と祝いの言葉を言い、落第した学生には「来年があるよ。大丈夫」となぐさめの言葉をかける。

現行のエチオピアの教育制度では1～8学年が小学校、9～10学年が中学校となる。小学校の修了認定試験(Primary School Leaving Certificate Examination)は各州で共通の試験であり、この試験に合格しないと中学校に進学することができない。試験科目は、アムハラ語、英語、数学、公民、社会、生物、物理、化



写真1 試験結果を見る人々

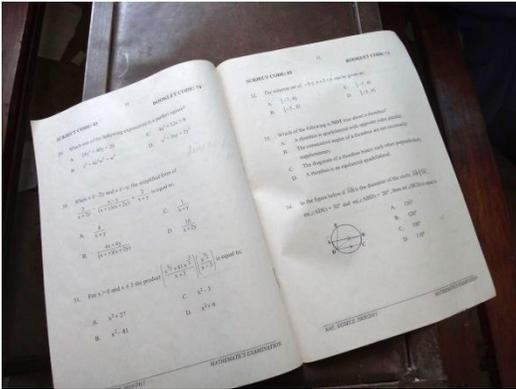


写真2 中学校の修了認定試験の問題用紙

学の8科目である。試験時間は各科目1時間、45～60問の問題を解いていく。自由記述の問題はなく、解答はすべてマークシートに記入していく方式である。南部州では教授言語を1～4学年はエチオピアの公用語であるアムハラ語、5学年より上の学年は英語としている。そのため、アムハラ語のみ問題文はアムハラ語で作られており、そのほかの7科目の問題文は全て英語である(写真2)。

2012/13年度(エチオピア暦2005年度)のA小学校の試験結果は芳しくなく、修了試験に通った学生は263人中122人で合格率は46%であった。筆者の知り合いの学生たちのなかでも試験の合格者よりも落第者のほうが多いような状況であった。落第した学生たちになぐさめの言葉をかけた後、なぜ試験に落ちたと思うかその理由を尋ねてみた。「試験問題が難しかった」「解答欄を間違えた」「時間が足りなかった」等々の理由を思い浮かべていたのだが、予期していなかった回答がかえってきた。「(自分の席の)近くに頭のいい子がいなかったから。」

昨年度と今年度、2年連続で修了試験に落第した学生(女子・推定19歳)は「去年は教室の入り口に一番近い席、今年も教室の隅の席で私の周りに誰もいない席だった。だから去年も今年も全部自分で解いたから落ちた。運が悪かった」と語っていた。カンニングがおこなわれるのはA小学校に限ったことではない。A小学校から徒歩4時間ほどの距離にあるB小学校に通っていた学生(女子・14歳)

は「ぎりぎりだったけど合格した。自分で解いた問題より、人から(盗んだ)問題のほうが多い。そうじゃないと私は落ちている。学生はみんなお互いの解答を(盗んで)いる。」と話していた。

多様なカンニング法

修了試験においてカンニングが当たり前のおこなわれる状況になったのはここ10年くらいの間のようなのである。A村には現在小学校と中学校があるが、10年前には小学校は6学年までしかなく、7年生以降は都市部に出る必要があった。2年前にA小学校を卒業した学生(男子・推定28歳)は「街の学校に通った学生たちが教えた。小学校ができた頃カンニングはなかったらしい。昔は盗むにしてもちょっと隣(の人の答案)を見る程度だった。最近のやり方は街からきたもの」と語った。

A小学校の校長(2013年9月時点)によると、カンニングの仕方は多種多様のようなのである。オーソドックスなものとしては、額に手をあて、考えているふりを装いつつ視線を手で隠すことによって隣の学生の解答用紙を盗み見る、というものがあつた。成績が優秀な学生の隣に座った学生がカンニングペーパーを作成し、巡回する教師が背を向けた隙に前後左右の学生に紙を手渡しで回していく。学生同士で予めサインを決めておき解答を教えるというものもある。例えば指を1本たてて頼杖をつくると解答はA、2本ならB、3本ならC、4本ならD(試験は4択式である)という具合である。昨年のA小学校での試験時にはカンニングペーパーを手渡しではなく、紐にくくりつけて回す方法が確認されている。カンニングペーパーの受け取り手の足に紐を結び、紐の先に解答を書いた紙を結び付け、紐を引っ張ることによって解答を結び付けたことを知らせ回収させる、というものであった。B小学校の卒業生(14歳・女子)も紐を使ったカンニング方法を使ったという。教室の壁にあいた穴から教室の外に目立たない色の紐を通し、紐の端と端には整髪剤の空き容器をくくりつけ、解答のやりとりをしたという。彼女に現在通っている中学校でも同じようにカンニングをしているのか、と尋ねたところ彼女は笑いながら「今の学校は教

室の壁がセメントだからできない。前の学校は土壁だからできた。穴だけだったし。それに中学校では自分でちゃんとやらないと」と語っていた。

カンニングすることを前提として、学校での登録名を変更する学生もいる。学生は全員、年度初めに在籍登録をする必要があるが、その際に学校での名前を変更することが可能となっている。改名は小学校入学の際に家庭での呼び名からアムハラ語で名前を新たに付けることがよくみられるが、高学年においても時に改名を申し出る学生もいる。

これまで試験時の座席は名前順であったため、成績優秀者の近くに座るために、成績優秀者と同じ頭文字からはじまる名前をつけるという。たとえばAbebeという名の学生の成績が良い場合、Addisという名に改名する、といった具合である。

□ カンニングをする人・される人 □

学生たちはなぜこぞってカンニングをするのだろうか。

「だって試験に落ちるもの」(女子・16歳・8年生)
 「人の解答を盗まないで試験に落ちたらどうするの」(女性教師・40歳・A小学校卒業)

カンニングせざるを得ない状況とはつまり学生たちが小学校での学習内容を全く理解していないことを示している。その背景としてA小学校校長は自動的に進級することと教授言語の問題を指摘している。制度上、1～3年生では全員が留年することなく進級するようになったため、授業内容を十分に理解していないまま進級していく学生も多い。3年生になっても自分の名前を正しく書けない学生もいるという。教授言語が学生の母語と



写真3 授業のようす

異なることも学習理解の大きな障壁となっている。1～4年生の教授言語であるアムハラ語は、ほぼ全ての学生が理解することができるが、5年生以上の教授言語である英語を理解できる学生はほとんどいない。授業では教師が黒板に書いたことを、その意味を考えることなく文字だけを写し取る学生の姿が目立つ(写真3)。

カンニングをされる側はどのように考えているのだろうか。今年の試験でA小学校の中で2位の好成績を修めた男子学生M(推定18歳)は次のように語っていた。「人の解答用紙は全く見ていない。自分はただ問題を解くだけ。周りの学生が(解答を写して書いた)紙を回していく。カンニングされることに対して特に何も思わない。むしろ、みんなと一緒に試験に通って進級した方がいい。」

学生たちにとって進級すること・卒業すること自体が学校に通う大きな目的となっており、学校で何を学ぶかということには意識があまりおかれていないようである。

□ カンニングの対応策とジレンマ □

こうした状況に対して学校側はどのような対策をとっているのだろうか。「カンニングは教師に見つかると名前をチェックされる。3回チェックされると失格になる。今までカンニングで試験を失格になった話は聞いたことがない」(男子・推定18歳)。カンニングに対する対応についてA小学校校長は次のように語った。「A村では学校が住民の間に定着して間もない。今は(学習内容を)どれだけわかっているかということよりも、まず学校というものに慣れさせることが重要である。だからカンニングを見つけても注意するだけ。追い出したことをきっかけに学校をやめられては困る。もしもこれがジンカ市(南オモ島の県都)なら(カンニングした学生を)教室から追い出している。」

前述したカンニングのための改名を防止するために、今年A小学校では学生を名前順に座らせなかったという。また周りの席の学生がカンニングをすることによって集中力が乱されて困ると申し出た学生に対しては、教室の外に机を出して受験させることで対処していたという。

こうしたカンニング防止策をとる一方で、同時にカンニングを黙認している部分もあるようだ。

「正直なところ、学校全体の成績は校長としての自分の評価にも関わる。だから(学校運営の監視役である)スーパーバイザーには最も成績が優秀な学生の名前だけ教えて2番目に優秀な学生Mの存在は伏せていた。成績優秀者はカンニング防止のために教室の外で受験させていたがMは教室内で受験した。今年Mの周囲に座っていた学生はみんな試験に通っている。」

前述したように学生たちの間では学校に通うことによって何を学ぶのか、ということに意識がおかれることなく、進級すること・卒業することに学校に通う主目的がおかれているようにつる。学校側もまずは通わせること・卒業させることを第一に考えており、何をどう学ばせるのかということに関心がほとんど向けられていない状況であるといえる。また裏を返せば、カンニングしてまでも進学するという状況が生まれるということは

教育熱が高まっているといえ、エチオピア農村社会のなかでもそれだけ学歴が必要とされるようになってきていることのあらわれであるとも捉えることができる。

学校に通う子どもが増えている今、次に考えなくてはならないことは教育の質の問題である。エチオピアの教育指針においても教育の質的改善は重要事項としてあげられている。「教育の質」といったときに、有資格教員数、1クラスあたりの生徒数、教科書数といった数値としてあらわれるものだけでなく、教授方法や学生の学習態度・学習に対する認識などの実際に観察しないとわからない部分にも注目する必要がある。フィールドワークを通して本稿でとりあげたカンニング事例のような見過ごされがちの問題に目を向けることによって「学校の本質」を問うことが「教育の質」の改善に貢献するのではないだろうか。

* 現在エチオピアでは独自の暦を用いており、エチオピア暦では9月11日が年始となる。

(ありい・はるか/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)